

千頭の魅力の再発見と新たな活用

福田亜紀

はじめに

1 千頭観光の現状

- 1.1 千頭駅周辺
- 1.2 観光客数の推移
- 1.3 観光客の声
- 1.4 千頭の人々の声

2 エコツーリズム—もうひとつの観光—

- 2.1 エコツーリズムとは
- 2.2 千頭におけるエコツーリズム
- 2.3 自然を生かした体験プログラム

3 内からの眼と外からの眼

- 3.1 外の地域から来た人々
- 3.2 周囲からの評価
- 3.3 エコツーリズムの発展

おわりに

はじめに

現在、従来の利潤追求を目的とした観光から、持続可能を目的とした観光に変わりつつある。そして持続可能な観光の1つにエコツーリズムがあるが、エコツーリズムの動きは世界中で起こっており、日本でも屋久島や西表島などが代表例として挙げられる。そして、観光客が減少しつつある千頭でもエコツーリズムを広めようという動きがあるが、様々な問題点を抱えている。本章では、西表島の例に照らし合わせながら、千頭の今後のエコツーリズムの可能性を探っていく。

1 千頭観光の現状

1.1 千頭駅周辺

千頭駅前には観光客向けの飲食店や茶店が並ぶ。駅前には休日になると観光客の姿を見ることができる。駅から北東へ向かうと川根大橋があり、大橋から西へ向かうと観光客の姿はなく、千頭の住宅街へと入っていく。住宅街には役場や交番、郵便局、診療所、生活用品店など、千頭に暮らす人々に欠かせない建物が存在する。千頭駅前と住宅街での景色は全く異なり、観光客と千頭の人々との境界が千頭駅から川根大橋の道にあるように感じられる。

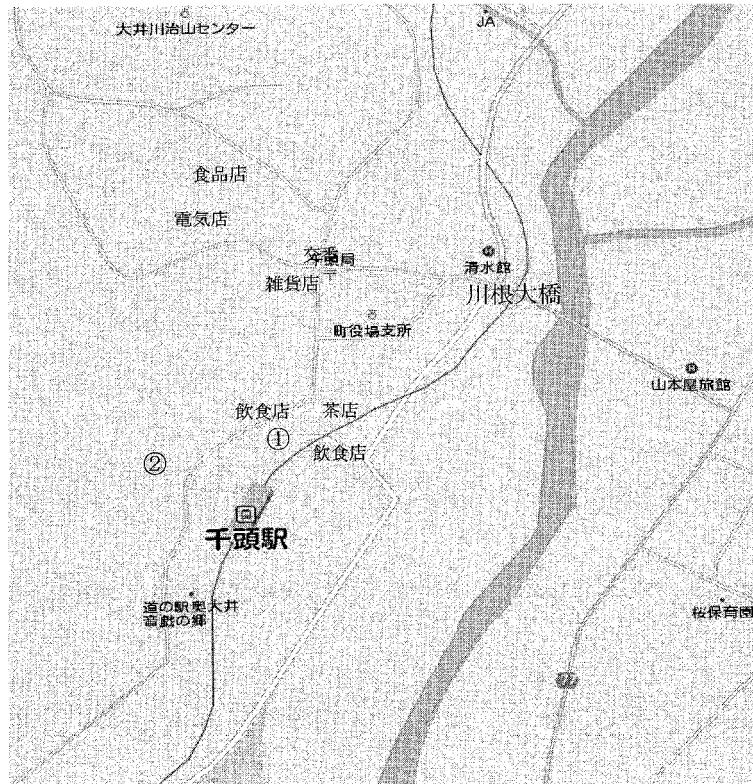


図1 千頭駅周辺の地図(gomapをもとに改変)

千頭駅周辺にはいくつかの観光スポットが存在する。まず、駅の南に位置する道の駅「奥大井音戯の郷」がある。「音戯の郷」は音と戯れることをテーマとした体験ミュージアムであり、入館料は大人500円である。館内では、野鳥の声や雷の音などの自然の音、オルゴール、オーケストラの音色を楽しむことができる。音戯シアターでは280インチの大スクリーンで、SLの映像を鑑賞することもできる。また、千頭の町には「音の散歩道」というものが存在する。「音の散歩道」は千頭駅から小長谷城跡小長谷吊橋、智者の丘公園、急須の展望台、両国吊橋、千頭別院、音戯の郷を順に巡るコースである。このコース全て歩くと約10kmあり、約3時間30分かかるが、小長谷城跡に行かずに川根大橋を渡るなどの短縮は可能である。現在利用する観光客はほとんどいないが、元々は観光客向けに作られたコースであり、千頭の街並みや自然を肌で感じることができるコースである。

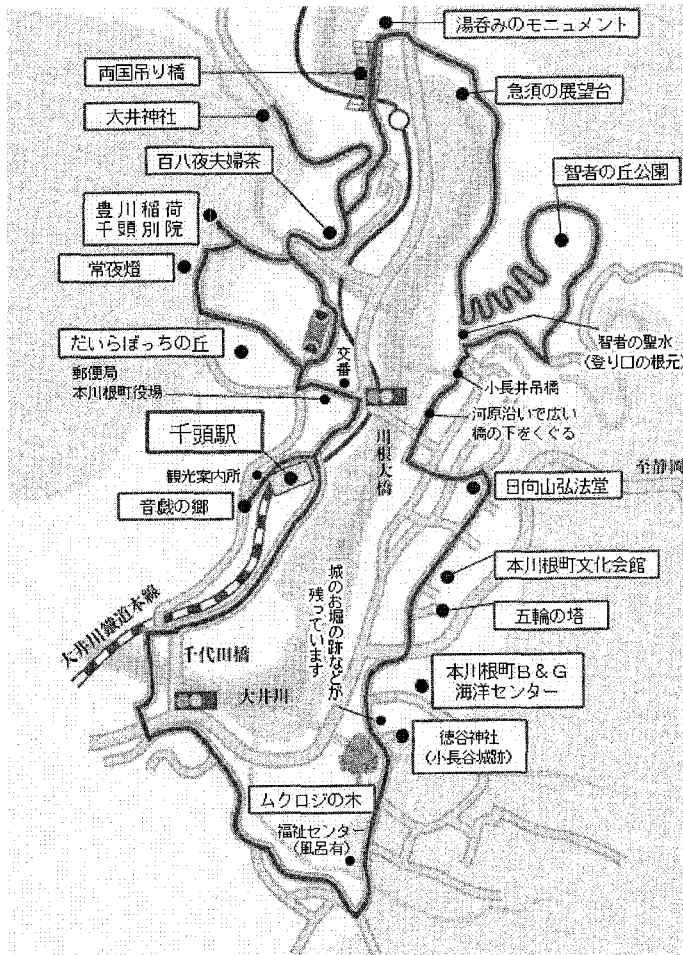


図2 音の散歩道コース(川根本町マウンテンパークインフォメーションより)

1.2 観光客数の推移

金谷から千頭をつなぐ大井川鉄道の主役とも言えるSL。SLが千頭駅に到着すると千頭駅前には多くの観光客で賑わう。しかし、一歩千頭の町へ歩き出してみると、観光客の姿はほとんどなくなる。また、SLの到着から時間が少し経過すると千頭駅前においても観光客は姿を消してしまう。図3は千頭駅における1年間の乗降者数をグラフにしたものである。

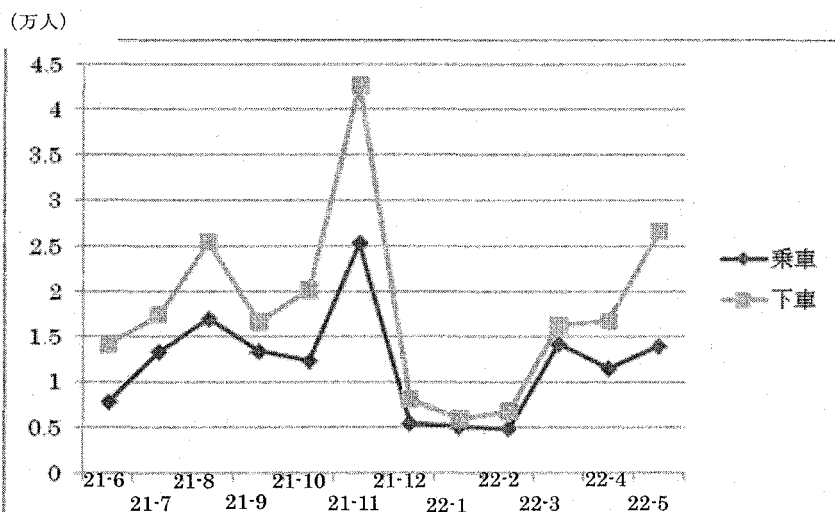


図3 大井川鉄道千頭駅における乗降者数(平成21年6月～平成22年5月)

乗車数と下車数にこれだけの差がある理由は、旅行会社が実施しているツアーの一環として観光客がSLに乗って千頭を訪れ、帰りは観光バスで帰ることがあることや、大鉄タクシーがマイカー陸送をしており、車を事前に千頭駅に陸送してもらい、帰りに車で帰ることがあるという理由が考えられる。このような理由から乗車数と下車数に差はあるものの、12月から2月にかけての冬場を除くと、ほぼ毎月1万人を超える人が千頭を訪れていることがわかる。特に、紅葉の時期である11月には約43000人も観光客が千頭を訪れている。

次に、図4を見てもらいたい。図4は千頭駅前の人々の動きをグラフにしたものである。調査の内容は、千頭駅から千頭の住宅街方面へ向かう人の数と、千頭駅から南西に位置する「道の駅奥大井音戯の里」方面へ向かう人の数を、千頭駅に電車(SLを含む)が到着する時刻から10分間、駅方面から通過する人数を調査したものである。千頭駅を訪れる人の中でどのくらいの人が千頭で観光しようとしているのか明らかにするためにこの調査を行った。千頭の住宅街方面へ向かう人を図1の①、道の駅方面へ向かう人を図1の②を調査地点とした。また、この調査を実施したのは6月5日の日曜日である。

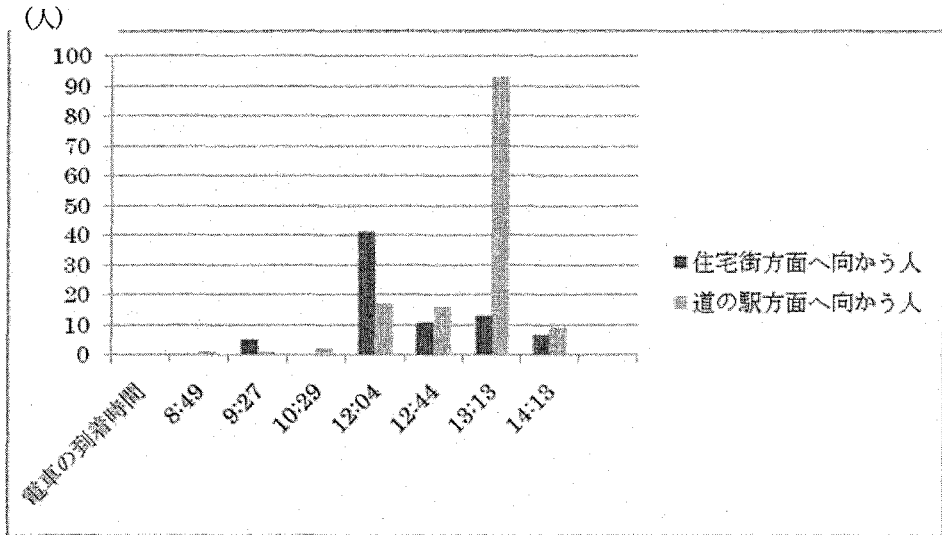


図4 千頭駅周辺の人の動き(平成22年6月5日)

図4を見てもらうと、午前中はほとんど人が訪れていないことがわかる。12:04の電車の到着後は約40人が観測点を通過したが、駅周辺で昼食を食べる場所を探していた観光客がほとんどであった。また、13:13には道の駅方面へ向かう人が約90人いるが、道の駅には駐車場があり、多くの人が道の駅というより駐車場に向かった。道の駅で販売員をしている女性に話を聞くと、日曜日の13時30分頃訪ねたとき、私がおの日2番目の客だったという。こうして見ると、調査の実施日は観光客が多く来る日曜であったにも関わらず、千頭を観光するために千頭駅に来る人々はほとんどいなかったことがわかる。

1.3 観光客の声

千頭駅前にいた観光客にインタビューを実施した。質問内容は旅行の目的や昼食を食べるところ、千頭まで来た手段と帰る手段などである。インタビューをしてみると、大半の観光客は千頭を観光するためではなく、SLに乗るため寸又峡温泉に向かうバスに乗るために千頭駅前にいたのである。さらに、駅前に食事できる店が数店あるが、観光客に話を聞くと、昼食を千頭でとるという人は少なかった。他にも、千頭駅の北東に位置する川根大橋でも2組の観光客にインタビューを実施した。この2組は川根大橋近くの千頭温泉に入ってきたという。どちらもSLに乗ってきており、一方は接阻峡温泉も旅行の目的であった。千頭駅は井川まで行く「南アルプスあぶとライン」の始発駅があり、接阻峡温泉もこの列車で行くことができる。どちらも千頭温泉に入った後はすぐに車で帰宅すると言っていた。また、観光客の中に旅行会社で働いている男性がいたが、その男性は「千頭には観光する魅力はない」と強く言っていた。千頭の北には温泉で有名な寸又峡があり、千頭駅から寸又峡行きのバスが出ているし、千頭駅から「南アルプスあぶとライン」に乗ると途中長嶋ダムや

接阻峡温泉を通り井川まで行くこともできる。観光客の話では、千頭は観光客にとってSLの終着点や寸又峡や井川に行く通過点でしかないという印象を受けた。しかし、インタビューをした観光客の中で、千頭観光を目的に千頭を訪れた観光客が1組いた。静岡県の磐田市と焼津市に住む50代女性の2人組で、千頭には今までも数回訪れたことがあるという。千頭の自然に魅力を感じており、インタビューしたときも千頭の緑を見るために訪れていた。千頭の町には「音の散歩道」というハイキングコースがあるが、この観光客は「音の散歩道」の一部を歩く予定であった。大半の観光客は千頭をについて、通過点という認識だが、少数ではあるが、千頭の自然を堪能したいという観光客もいるのである。

1.4 千頭の人々の声

千頭の人々についてもインタビューを実施した。千頭駅前店で店を営む田畑さんは観光客の来訪を喜んでいる一人である。田畑さんは川根本町の名産である川根茶を販売している。時間があるときは観光客とコミュニケーションをとり、パンフレットに載っていない見どころを教えるなどしている。また、お茶好きのお客には住所を聞き、年賀状を出したり、案内を届けたりしているそうである。田畑さんの茶店はコミュニケーションとることによって、リピーターが多いという。田畑さんは「金儲けばかりでなく、おもてなしをして、リピーターが来るような商売をやるべき」と考えている。一方、観光客について困ることもあるようである。千頭駅前の広場にある桂の木の周りに砂利があるのだが、その砂利をそばの水場に入れる人がいるそうである。実際に観光客の子どもが投げ入れていたが、観光客のマナーは気になるようである。

千頭駅前カフェを営む内野さんと、観光協会の小倉さんは千頭の町に観光客を呼び込もうと働きかけている。2人は、千頭の町が活性化してほしいと考えており、観光客を呼ぶには地域ブランドが大事だと考えている。SLは多くの観光客を運ぶが、観光客が利用するのはSLだけだという。また、千頭の人々は観光に対して意識が低いと感じているようであり、特に町の活性化のためには若者の力が必要だと考えている。

千頭に観光客を呼び込みたいと考える人がいる一方で、千頭に観光客が来ることを良く思わない人もいる。観光客は車で来て、民宿に泊まらず日帰りをするため、千頭に経済的効果を与えないという。それにもかかわらず、ゴミを捨てていく人がいることに怒りを感じているようである。駅前で店を営む人たちにとって観光客はありがたいものの、マナーの悪い観光客に迷惑している地元住民の人もいるのである。

このように、千頭では観光客は通るものの、千頭で観光する人がほとんどいない状況であり、千頭の人々も働きかけてはいるものの、未だに観光客の増大には繋がっていないようである。しかし、現在千頭に魅力を感じ、新たな観光をしていこうという動きがある。それは千頭の自然を生かしたエコツーリズムという観光形態である。

2 エコツーリズム—もうひとつの観光—

2.1 エコツーリズムとは

これまで、世界および日本では基本的にマストツーリズムを前提に観光開発がなされてきた。そして、観光開発は、開発の対象となる地域の外部の企業が開発主体となるケースが多かった。このような外発的観光開発では、利潤追求を目的とし、地域社会の意向が軽視、または無視されることで、各地の貴重な地域資源の破壊や悪用、誤用などが行われてきた。そこで、注目されてきたのが持続可能な観光であり、特に生物多様性の保全に着目した姿がエコツーリズムであった。エコツーリズムは、以下の3点を目的の上に成り立つ観光システムの概念である。

- ① 自然環境の保護、管理の運営を通じ、それらの資源が持続的に、かつ適切に利用できるよう、資源を保全していくこと
- ② 地域社会の活性化と地域産業を育成すること
- ③ ①、②を成り立たせるために、地域固有の資源をいかした観光手段を導入し、産業を成立させること

これら3つの相互連帯をより密にし、調和させながら、地域の自律的發展をはかろうとするしくみをもった観光が「エコツーリズム」であると言える。また、エコツーリズムには3つの要件の構築と発展が必須である。「より多くの地域住民が資源価値を深く認識していくプロセスの構築」「郷土意識育成(地域社会形成に伴う積極的社会参加意識の育成)プロセスの構築」「ツーリズムによる経済・社会変動をふまえた地域づくり活動への展開プロセスの構築」の3要件である。また、エコツーリズムに伴ってさまざまな克服すべき課題が発生する。地域の資源(生物・人文)、生活文化、社会システム、伝統的土地利用に対して主に5つの面において課題があると考えられる。それは、生物の多様性への脅威、新しい土地利用、資本、観光客、異文化である。エコツーリズムを進めるには、生物の多様性への脅威に対して生物系の固有性の保全、新しい土地利用に対して伝統的な土地利用に基づく体系の維持、資本に対して地域の伝統に支えられた分配システムの確保と社会システムの維持、観光客に対してインフラ整備と地域住民の伝統的生活スタイルのバランスの維持、異文化に対して地域固有の文化の価値の認識をしていくことが課題とされる(真板 2001)。

2.2 千頭におけるエコツーリズム

千頭周辺でもエコツーリズムの活動をしている人々がいる。寺田三根生さんは千頭の対岸の上岸に住み、寺田農園を経営している。三根生さんの生まれは川根であるが、一度川根から他の地域に移り住み、ホテルのコックなどを経験して再び川根に戻ってきた。寺田農園には、ブロッコリー・トマトなどの多くの野菜と、梅の木、木工所、みそ加工場、養鶏場などがある。エコツアーとしては、寺田農園にある梅の木を利用した梅干づくりを体験することができる。この体験企画は、川根本町エコツーリズムネットワークが主催しており、寺田さんの母親であるうめのさんが講師となり、梅の漬け方などの指導を行っている。ツアーの内容は、寺田農園で摘まれた梅の実のへたを取って、塩漬けし、赤紫蘇で染

めて持ち帰ることができるという内容である。そして、寺田農園でのエコツアーの後には三根生さんがコックの経験を生かして、手作りのランチを参加者に振舞っている。地元の人の中には、三根生さんのランチ目当てにエコツアーに参加する人もいるそうである。また、現在三根生さんは寺田農園の敷地内にツリーハウスを建設中である。ツリーハウスとは通常樹木の上に作られた木造の家屋のことである。三根生さんは、ツリーハウスを大人も子どももゆっくりできる場所にしたいという思いから建てているという。寺田さんは寺田農園を開かれた場所にしたいと考えており、地域の外の人にとっても内の人にとってもエコツーリズムでありたいと考えている。

東京から千頭に嫁いだ中野久江さんが所属するつどいの会もエコツーリズムの活動をしている。寺田農園にあるみそ加工場でみそづくりをしたり、エコツアーでお弁当を提供したりしている。お弁当はトレッキングのときに提供し、中身は地鶏の卵を使っただてまきやいもがら、たけのこ、しいたけやわらびを入れた炊き込みご飯など、主に地元でとれた食材を利用して作っているそうである。お弁当は参加者から好評のようである。このお弁当は豪華である必要はなく、この地でとれたものを主に使用し、この地に合ったお弁当にすることが大事だと考えている。現在食の安全が重要視される社会において、この地でとれたものを使うことは、食の安全の面でも必要なことであるという。

20年くらい前に平栗に移住してきた夢屋のゆみさんもエコツーリズムを推進している一人である。ゆみさんは染物を販売しており、染色体験を行うこともできる。ゆみさんは地元の人には生活の不便さが先に来てしまい、地元の良さを知らないと考えている。千頭の人はこの地は「何もない」と言うが、山菜も売ればお金になるし、ここにあるものを利用すれば良いという考えである。実際に、夢屋の染色に使われているものはほうれん草などのこの地で作られたものであった。また、ゆみさんはマクロビオティックの教室を開いて、受講生の人にマクロビオティック初級コースを教えている。マクロビオティックとは、人と生き物の環境のバランスを保ちながら健康を維持することであり、正しい生活と食事が鍵となっている。この教室には他地域からの受講生のみではなく、地元の人も参加している。ゆみさんは千頭でエコツーリズムの活動をするに際し、千頭の良さを千頭の人みんなで見極めてみんなで協力してやる必要があるという思いがある。



写真1 千頭駅前



写真2 千頭の住宅街へ行く道



写真3 寺田農園の畑



写真4 寺田農園の養鶏場



写真5 寺田農園のみそ加工場



写真6 寺田農園のツリーハウス

2.3 自然を生かした体験プログラム

川根本町の役場でもエコツーリズムに向けた活動が行われている。川根本町では多くのエコツーリズム体験プログラムの提案がされている。この体験プログラムは川根本町役場商工観光課がまとめている。プログラムは大きく6つに分かれており、「自然体験プログラム」「自然観察プログラム」「水系プログラム」「歴史・文化プログラム」「食プログラム」「ものづくりクラフトプログラム」である。自然体験プログラムでは、森林浴しながらゆっくりトレッキングをし、のんびりした時間を提供している。また、森歩きだけではなく、吊り橋めぐりや天体観測などを体験できるコースもある。自然観察プログラムでは、バードウォッチングや桜や山々を眺めるコースなどがある。水系プログラムでは、カヌー体験や川遊び、魚のつかみ取り、アウトドア体験、滝での森林浴とヨガを体験できる。歴史・文化プログラムは、語り継がれてきた話を聞きながら古道を散策、寺院や神社めぐりなどができる。食プログラムでは、お茶摘み体験や、うめのさんの梅干づくり、ブルーベリー摘み、ピザづくり、味噌づくり、こんにゃくづくりが体験できる。ものづくりプログラムでは、フェルトづくりやオーストラリアの先住民アボリジニーの楽器「ディジリドゥー」づくり、瓢箪のスピーカーづくり、染色体験などができる。これらの体験は、川根に住んでいる人が提供しており、寺田農園で行われるうめのさんの梅干しづくりや、ゆみさんの染色体験もこのプログラムに入っている。

3 内からの眼と外からの眼

3.1 外の地域から来た人々

現在千頭でエコツーリズムという活動を行っている人々の多くは、外の地域から来た人々である。エコツーリズムを行っている中野久江さんと夢屋のゆみさんは、「川根をアスファルトの町と同じにする必要はない。地元の人が地元の良さを知るべき。」と語っている。地元の人々は千頭に豊かに存在する自然の良さをしっかり理解していないという。さらに、現在は千頭に住む子どもの中で自然の中で遊ぶ子があまりいないために、地元のことを知らないかと危惧している。子どもが地元の良さを知るためにも、まずは親が地元の良さを知り、一緒に遊ぶべきだと考えている。また、「千頭の人々は、ものを売ってお金を得ることを恥ずかしいと考えている」と感じているようである。中野さんは、現在売るという行為を意識しているそうで、売ることにより地域で、もののやり取りが活発化すると考えている。自分たちが作った味噌は売り、自分で作りたい人には作らせてあげ、作って欲しいと頼んできた人にはお金をもらって作ってあげるようである。地元の人々は、「千頭には何もなくて食べていけない」と言うが、千頭にある山菜などここにあるものを使って売ることが可能であると考えている。

他地域から千頭に来た中野さんやゆみさんのように、千頭に生まれ育った人よりも他地域から千頭に来た人々の方が地域の自然に魅力を感じ、活用しようと思うようである。千頭で生まれ、他地域に移り、再び千頭に戻ってきた茶屋の田畑さんは、「千頭で生まれ育っ

た人は大海を知らない。内にいる人のほうが知っているようで知らず、外の地域から来た人のほうが千頭のことをよくわかると思う」と語る。千頭の豊かな自然を、千頭で育った人々は当たり前のものであると考えており、自然の少ない地域から来た人のほうが自然に対してありがたみを感じやすい。また、千頭で生まれ育った人々は他の地域を知らないために、千頭の良さも悪さも気づきにくく、他地域から来た人々は千頭を他地域との比較することができるために、千頭地域に対して評価しやすいということが考えられる。

3.2 千頭の中での評価

千頭におけるエコツーリズムの活動について千頭に住む人々に尋ねてみた。すると、千頭に暮らしながらも、千頭でそのような活動が行われていることを知らない人が多いという現状が見えてきた。エコツーリズムの活動に対してはインタビューに答えてくれた人々が揃って「大変良いことだと思う」と、肯定する姿勢は見せたものの、まだ千頭全体でエコツーリズムの活動が浸透していないと同時に、千頭の人々の観光に対する意識の低さが伺える。中には「エコツーリズムの活動は素晴らしいとは思いますが、自分とは生活が違うし真似はできない。そういった活動を行っている人は自然保護できる生活を送っているだろうけど、自分は会社員だからそういった生活はできない。」という意見もあった。千頭地域でエコツーリズムの活動が行われることは肯定しつつも、その活動に参加する意思はないようである。千頭において、エコツーリズム参加者と住民との間に大きく意識の差があることは否定できない。

他地域から来た人のほうが自然保護に対して積極的であるということは、千頭に限って言うことではない。エコツーリズムで有名な西表島でもエコツーリズムを進めていくうちに移住してきた保護派と島民との意識の差が見られた事例がある。西表島では、1965年に天然記念物にも指定されたイリオモテヤマネコが発見された。それまではマスツーリズムの観光形態をとっていた西表島であったが、それをきっかけに西表島の生物種の保護を訴える声が高まった。そのときの様子について海津・真板は、保護派の人たちは自然を保護するために一切の開発に反対した一方、開発派の島民は開発なくして生活が成り立たないと主張したために、「ヤマネコか、人間か」との議論で島が真っ二つに分かれて対立し、このときの保護派は本土から西表島に移り住んできた人達で、生活圏を東京におく人々や、研究者が中心だった、と述べている(海津・真板 2001)。西表島にも見られるように、他地域の人のほうが地域の自然保護に対して積極的である。地元の人々は、単に地域の魅力に気付かないだけではなく、その土地で生活していくために、自然保護に対して消極的であるともいえるであろう。このような、地域内での意識の差が、エコツーリズムを発展させるうえで克服しなければならない課題の一つになっている。

3.3 エコツーリズムの発展

川根本町では、町内で活動するカヌーの指導者やトレッキングのガイド、そば打ち名人、

民話の語り部、伝統継承者、農林業者など、これまで分散していた人的情報を集約することを目的とした川根本町エコツーリズムネットワークが2008年3月8日に設立された。川根本町はエコツーリズムの活動を始めたばかりである。現在、千頭のエコツーリズムにおいて、エコツーリズム参加者と地元住民の考え方に格差があるが、今後の千頭におけるエコツーリズムの発展の可能性を、エコツーリズムが成功したと思われる西表島の例から考えてみる。

西表島におけるエコツーリズムの発展の背景には、エコツーリズムにかかわってきた人々の地域の文化、歴史、自然などの資源に対する価値認識の変化と、それに適応した関わり方の深化、および協会とそれを取り巻く地域住民との関係の緊密化、さらに行政との一定の距離を保った上での関係の強化などの課題を克服し続けたことが挙げられる。具体的には、住民参加による資源価値の発見が挙げられる。イリオモテヤマネコの発見を契機に起こった「保護か開発か」という論争の後に、200人もの島民参加・協力により歴史、文化、自然、生活に関わる資源調査が行われ、島民全体に「人と自然の調和ある発展のあり方の模索」を考える機会を提供し、エコツーリズムという考え方を受け入れやすくする環境を形成したと考えられる。また、資源情報のストックと共有による島の誇りの育成も行った。200人の島民参加で行われた調査結果を『西表島エコツーリズムガイドブック』という形で島民との資源情報の共有を図り、島民だけではなく、島外に出て行った知り合いや家族にも島民を通じて配布され、島そのものが在住島民の自慢の対象として価値を高めていった。さらに、「エコツーリズム協会」だけではなく、外部に対しての受け皿として「西表野生生物保護センター」を設立し、その中に事務所が設置された。組織化することにより、地域住民、旅行者、研究者、旅行業者、行政など多様な分野との連携が緊密になり、外部との連絡や協力、連携、協会会員同士の意見交換がなされやすくなった(海津・真板 2001)。前述したように、西表島においても千頭のように、地域内での意識の格差があったが、西表島では、島民に西表島のエコツーリズムについて考える機会を与え、働きかけを行うことで、島民との連携を図ってきたのである。また、その働きかけの結果、西表島はエコツーリズムの地と認識され、西表島への入域者数が増加したという。さらに、以前は島外に出て行った若者は帰ってこないことが多かったが、最近では外で仕事をしながら、1年の半分を西表島で過ごし、エコツアーガイドや海人の仕事をする若者が増えている。西表島出身者ではないが、西表島に就職することを望み、西表島に移住する若者も若干であるが増加しているという。そして、島民の意識にも変化があり、地域独自の視点こそがエコツーリズムのプログラムの魅力の源である、という認識が育ち、住民がガイドを行うことの意味も浸透してきたそうである(海津・真板 2001)。千頭においても、地元住民と連携をとり、エコツーリズムの活動が成功すれば、西表ほどの劇的効果はなくても、似たような効果が期待できるはずである。

おわりに

現在、千頭には観光客がほとんど留まらない。駅周辺には道の駅や「音戯の郷」という施設があり、「音の散歩道」というハイキングコースが設定されているものの、地元の人も観光客も利用者数は少ない。千頭駅がSLの終着点であることと、寸又峡への通り道であることの2つの柱によって、現在の千頭における観光業が成り立っているといえるであろう。そこで、豊かな自然ばかりで、見所は何もないと思われる千頭であるが、千頭における都会にはない豊かな自然を活用するエコツーリズムの動きは注目すべき点である。都会では、高層ビルや人口の多さに息苦しさを感ずる人も多く、そのようなときに求めるものは自然であろう。田舎に移り住む勇氣はなくても、自然豊かな地で自然を体験したいと考える人は多いはずである。また、外で遊ぶ機会が少なくなった子どもたちに自然を体感してほしいと考える親も多いはずである。「千頭には自然しかない」ではなく、「都会にはない豊かな自然が残っている」と考えることもできるだろう。そして、川根には自然のありがたみを感じて自然を生かした活動をしている人がおり、川根の自然を生かした体験プログラムが多く提供されている。しかし、千頭地元住民の中にはそのような活動を認知していない人が多くいる。エコツーリズムには、外の地域の人々に自然を生かした観光を提供するのは勿論であるが、地元住民の人と地域のことを知る機会を共有し、地域の良さについて共に考えることも大切である。エコツーリズムについての地元住民の理解を得るには、西表島の例がヒントだと考えられる。西表島のように、地元住民を巻き込んだ活動をし、そして地元の人に千頭におけるエコツーリズムの活動についてもっと情報発信することが大切である。そして、地域住民とエコツーリズム協会、観光協会などが密接に関わってエコツーリズムを進めることが、川根におけるエコツーリズムの発展に重要なポイントであると考えられる。エコツーリズムの効果には、観光客の増加や若者のUターン、Iターン、地域の活性化などが考えられるが、主に若者のUターンと都市部から地縁のない地方へ移動するIターンは注目すべき点であろう。現在千頭では高齢化が進んでおり、若者は千頭を離れて他地域に移り住む人が多い。そこで、エコツーリズムによる地域の活性化により若者が千頭に来れば、地域は更に活性化するとともに、子どもの増加にも繋がるであろう。これらの効果を得るためにも、まずは千頭地域内での情報や意識の共有が必要である。西表島の例を見ても、まずは地域内での意識格差の解消を目指すことが第一である。現在でも西表島においても完全に格差が解消されたわけではないが、地元住民に働きかけを行うことによって、西表島におけるエコツーリズムが前進したことは確かなことである。川根にもエコツーリズムネットワークという核となるものがあるのだから、エコツーリズムネットワークを中心に地域住民との壁を取り除くことができるはずである。そして、地域の魅力を外に発信する前にまずは、地域全体が地元の資源の魅力共有し、共に考えることが大切である。地域が一体となれば、千頭におけるエコツーリズムが前進することは十分可能なことであろう。

参考文献

海津ゆりえ・真板昭夫

2001 「西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史的考察」『エコツーリズムの総合的研究』 国立民族学博物館

真板昭夫

2001 「エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」『エコツーリズムの総合的研究』 国立民族学博物館